



2009/02/07
『カティンの森』上映会で、
ラデックさん(左から2人目)
写真提供:富山信夫さん

POLE

第69号 2011.4.1
北海道ポーランド文化協会誌

発行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北32条
西5丁目2-31-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610



4月16日~17日
北大学術交流会館



ポーランド
現代映画
セレクション
2004-2009



第55回 例会ご案内

会員には招待券を一枚同封しています

当日 一般 1,200 円 / シニア 1,000 円
学生 500 円

前売り 一般・シニア / 1,000 円

このたびの東日本大震災により犠牲になられた方々、また被害を受けた多くの皆様にお悔やみとお見舞いを申し上げます。

とても他人事とは思えません。

私たち、上記の上映実行委員会は救助活動や避難生活のお役に立てるよう、収益の一部を寄付したいと考えています。

駐日ポーランド共和国大使館の協力あつての上映会がついに、実現します！日本での公開があまりに少ないポーランド映画の傑作を、道内初公開。おまけに当日は、一等書記官ラデック・ティシュキェヴィッチさんがご来札。

さらに、ドキュメンタリー監督のヴァルデマル・チェホフスキさん(ロドヴィッチ大使の夫)のご参加も急ぎょ決定！

4作品はどれも興味深いです。なかでも『裏面』サビナ役の激情的な行動とおっとりした物腰がアンビバラントに共存する描写は陰影に富み、とてもエキセントリック。美しすぎる光が差し込む室内の映像や繊細で華奢な所作など・・・みどころ満載です。かつて、「ポーランドの政治的不条理」をテーマにした映画をみたことのある人も満足します。

今回の「ポーレ」は作品の紹介を7ページにわり組みました。悲劇の中にも品格ある都市ワルシャワや、古都クラコフの街並みや静かなたたずまいがスクリーンに現われます。 乞うご期待！
氏間多伊子 (上映実行委員)

開始時刻 (終了時刻)	4/16(土)	開始時刻 (終了時刻)	4/17(日)
11:00 (12:40)	ぜったいにダメ!	11:00 (12:50)	救世主広場
12:45 (13:00)	<書記官の舞台挨拶>	13:10 (14:50)	あなた、嘘をつかないで
13:20 (15:00)	裏面	14:55 (15:10)	<書記官の舞台挨拶>
15:20 (17:10)	救世主広場	15:30 (17:10)	裏面
17:30 (19:10)	あなた、嘘をつかないで	17:30 (19:10)	ぜったいにダメ!

4 作品 日本語字幕付き 詳細は同封の折り込みチラシをごらんください。

主催：ポーランド現代映画セレクション 2004-2009 実行委員会 (北海道ポーランド文化協会・札幌映画サークル)
協賛：駐日ポーランド共和国大使館 後援：札幌市、札幌市教育委員会

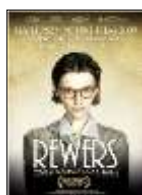


上映 4 作品

“民族の傷” 捉え直す新世代の映画作家たち

— 『裏面』 に見るワイダ的伝統への敬意と挑発 —

実行委員長 佐光 伸一

『ぜったいに
ダメ!』
(2004) 100 分リチャルト・
ザトルスキ監督『裏面』
(2009) 96 分
ボリス・
ランコシュ監督2009 年度ポーランド
劇映画祭グランプリ
受賞作品。『救世主広場』
(2006) 105 分
ヨアンナ・コス
ニクラウゼ、
クシシュトフ・
クラウゼ監督2006 年度ポーランド
劇映画祭グランプリ
受賞作品。『あなた、
嘘をつかないで』
(2008) 100 分
ピョートル・
ヴェレシニャック
監督

東欧諸国の映画には歴史をテーマとしたものが多い。第二次世界大戦、スターリニズム、ソ連共産党による支配など、多くの歴史の負の遺産を抱えるからである。これらの国の芸術家たちは、文学、美術、音楽、映画を通し、「民族の傷」を表現し続ける。ポーランドもその例外ではない。『地下水道』、『灰とダイヤモンド』などにより我が国にも多くのファンを持つアンジェイ・ワイダの一貫したテーマとなっているのは、「歴史の被害者」としてのポーランドの姿と言える。

映画の中で歴史を描くには、大きく分けてふたつのアプローチがあると思う。ひとつは、取り上げる歴史的事件を、史実に忠実に描こうとする姿勢である。その出来事を忘却の淵から救う、民族としての記憶に刻むことを志向した映画である。その代表的な映画作家がワイダである。抵抗三部作、『大理石の男』、『コルチャック先生』、『カティンの森』など彼の作品はすべてこの原則に基づき創作されている。

ふたつめのアプローチは、歴史をテーマとしながらも、時代を超えた普遍的なものをそこに描くという姿勢である。描かれている時代は過去であるが、善と悪、人の心の闇など、そこに潜む普遍的なものを、そこに描くという姿勢である。描がられている時代は過去であるが、善と悪、人の心の闇など、そこに潜む普遍的なものを浮き上がらせる。過去を鏡として、現在のわれわれの姿を映し出す。

こちらの代表的な映画作家は『エロイカ』、『パサジェルカ』などを制作したアンジェイ・ム



『パサジェルカ』

ンクそして今回ご紹介するこの『裏面』の監督であるボリス・ランコシュもそのひとりであると言える。物語は、1952年、スターリン主義に支配される首都ワルシャワ。独身女性サビナはある夜、非行少年に絡まれたところをダンディなブロニスワフに助けられる。ふたりの仲は急速に接近し、やがて深い関係に。しかし実はブロニスワフは秘密警察の手先であり、彼女に協力を命じる。その時、彼女が取った行動を巡り、物語は急展開していく。

監督のボリス・ランコシュは1973年生まれの38歳。本作が本格的な長編デビュー作である。デビュー作でいきなり「スターリン主義」というこれまでポーランド派の巨匠たちが取り上げてきたテーマを取り上げる。

ナチスドイツへの蜂起を描く『地下水道』、その後ソ連に解放されたが共産党に対する反乱分子を抱えるポーランドを描く『灰とダイヤモンド』、そして『裏面』はそれに続くソ連による独裁体制が確立した1950年代初頭を描いている。監督がポーランド派の伝統の継承を意識していることは明らかである。しかしそれは伝統に対するオマージュではなく、むしろ挑発、パロディなのである。ワイダを代表とするポーランド派に特徴的なのは、歴史におけるヒロイズムである。『地下水道』をさまよう人たち、『灰とダイヤモンド』の青年マチェクなど、歴史と戦い美しく敗北していく主人公たちの姿を描いていく。

しかし『裏面』では市井の3人の女性のしたたかさが、巨大なスターリン主義という悪にささやかな勝利を上げる。体制に順応できず反乱分子となった『灰とダイヤモンド』のマチェクと、体制に順応し秘密警察となった『裏面』のブロニスワフはともに政治システムが理由で命を落とす。正反対のふたりは同じコインの表面と裏面である。

ワイダの作品では、善と悪とははっきりと描き分ける。悪のイメージを担うのは、ナチスドイツであり、ソビエト権力。ワイダは歴史の不幸のすべての源泉を

『灰とダイヤモンド』





外部の敵に求めることで、ポーランド人の民族としての誇りに訴える。

ランコシュの『裏面』では、スターリン主義をテーマにしているにもかかわらず、ロシア人は直接登場しない。登場人物たちは、ソ連の支配にさまざまな形で翻弄されるポーランド人たちである。そのことによって歴史の意味をポーランド人のモラルに鋭く問いかける。歴史を捻じ曲げてきたのは自分たち自身ではなかったのかと。

この作品のあるエピソードでは、一枚のコインが象徴的に描かれる。コインの「おもて」と「うら」が意味するものは何であろうか？まずは歴史の「おもて」と「うら」。教科書で描かれる国家、民族という「おもて」の歴史と、そこに生きる一般庶民の「うら」の歴史。大義のために死ぬことと、したたかに生き残ることの対比。ダンディな紳士から野獣的な権力の手先に変身するブロニスワフの2面性。それよりはるかに恐ろしいのが、主人公サビナの清楚で生真面目、従順な彼女の意外性。人間の内面の底知れぬ深さを感じさせる。観客それぞれが監督の仕掛けたさまざまな「おもて」と「うら」を読み解くことで、自身の持つ価値観をもう一度根底から問い直すことになる。サビナの取った行動ははたして正義なのか、その延長線上にある現在の幸福の意味とは何かを。

『裏面』は、スターリン主義の時代をモノクロで、21世紀の現在をカラーで描写している。モノクロシーンに、当時のニュースフィルムや街の風景の映像を巧みに組み合わせることでドキュメンタリーのような効果を生み出すというポーランドの伝統的な手法を利用している。その一方、影やコントラストを多用した色調やセットで撮影したり、集合住宅の一室を舞台にすることで閉塞感を表現し、欧米のフィルム・ノワールの伝統も取り込んでいる。ジャズの即興的な音楽を効果的な使うなど全体としてスタイリッシュな作品に仕上がっている。

ポーランド映画ファンなら思わず嬉しくなるような過去の名作に対するオマージュ(パロディ)もふんだんに取り込まれている。母親役のクリスティナ・ヤンダは、『大理石の男』、『尋問』というやはりスターリン主義を描いた作品の主人公を演じていた女優。両作品では権力と闘う戦士だった彼女が『裏面』では笑いを誘うコミカルな役を割り当てられている。

また映画の冒頭の映画会社のクレジットが出るところにご注目いただきたい。タイプライターの音に合わせて「KADR」という制作会社の名称の活字が現れる。これは『地下水道』、『灰とダイヤモンド』の冒頭とまったく同じである(もちろんパロディ)。このような「オタク心」を刺激するようなサービス精神にもあふれている。

私事で恐縮だが、筆者は今年の3月久しぶりにポ

ーランドを訪れた。旧知の映画研究者や友人に「最近のお勧め作」と聞いた際に、口を揃えて出てきた作品が、本作『裏面』であった。このような早いタイミングで

鑑賞できるのは、ひとえにポーランド大使館のおかげである。この場を借りて感謝の言葉を述べたい。

(さみつ・しんいち/ 実行委員長・北大学術研究員)



子供たちを守ることに生命を捧げた実在の人物ユダヤ人孤児院院長『コルチャック先生』

最高！ お茶の間試写会

～ 実行委に参加して～

中村 京子

新年早々から実行委員会に参加している。こんな活動は何年振りだろう？とにかく久しぶりなので、初めて経験するような新鮮な気持ちでやっている。

2月13日、50インチテレビを持っている会員のお宅で上映予定の作品を観る機会があった。急きょ決まった小さな実行委試写である。実行委員ら8人が居間に思い思いに陣取ってアットホームな雰囲気。持ち寄った食材で手巻き寿司を握って食べ、ワインやウーロン茶で喉を潤す。1作終るごとにコーヒープレイクもあり、感想や意見を語り合う楽しいひと時を過ごせた。

でも私自身久しぶりに3本もの映画を続けて観たから次の日はあくびが止まらず困った。本番では両日も4本上映するが、流石に試写は全部観ようとはならなかった。『裏面』『あなた、嘘をつかないで』『救世主広場』の3本を観たのだが、それぞれ特色があって面白かった。もう1本の『ぜったいにダメ！』は当日の楽しみに残した(ホネは疲れたから)。

現代のポーランド映画を知りたい方は是非4本観るようお勧めしますが、時間が無く1本だけと言う方には、私としては『裏面』をお勧めします。

私にとってポーランド映画はあまり馴染みの無いものとなってしまっていたけれど、最近のポーランド映画をまとめて初公開できるこの機会を嬉しく思うし、お金を払って観る価値のある作品であることは間違いないので会員はもとより、お知り合いの皆さまにもぜひ観ていただけたらと思います。

(なかむら・きょうこ/ 実行委員・札幌映画サークル)





金貨の『裏面』にひそむ秘密

トマシュ・スタシンスキ
(在札幌ポーランド人)



『裏面』(2009) ボリス・ランコシュ監督

映画『裏面』の出来事は、スターリンによる弾圧が頂点に達していた1950年代のワルシャワを舞台にしている。その当時は例えば、金貨を所有していること、自分の考えを表明することなどが犯罪であり、昼も夜もいつ何どき公安部がやって来て逮捕されるか分からなかった。同時にそれは戦争の破壊の後ようやく正常な生活に戻りつつあったワルシャワであり、店や映画館が姿を見せ、通りは市電や初めて登場した自動車であふれて始めていた。

(※以下ネタバレ可能性あり)

家族の平穏と安全のため

主人公は独身で、内気で、あまり魅力的ではない、ちょうど30歳になったばかりの女性である。サビナ＝写真左＝が願うのは、何よりも安定であり、政治には関心がないように見え、文学出版社で働き、そこで大好きな詩に携わっている。

やすらぎのオアシスは母＝写真右＝と祖母と兄からなる市民階級の家族である。彼らは戦前の中流階級出身であり、映画の舞台である戦後には土地を接収され、政治的に疑いの目を向けられていた階級である。適応し、妥協し、問題を避けるためには、どのような努力をすべきであろうか。社会主義の絵画や新しい高官の肖像画を描いていた兄のおかげで、彼らは、当時としてはぜいたくな、十分に広く、部屋がいくつもある住居と、屋根裏にはアトリエを持っていた。家族の平穏と安全のためなら、サビナの母は戦前から彼らのところに残った一枚の金貨さえ国家に差し出すつもりである。しかしここでサビナは初めて弱さの裏に強い性格を秘めていることを見せ、1ドル金貨を一枚そしてまた一枚と忍耐強く飲み込み、排出し、洗い、そして再び飲み込む。それは公安部による自宅の調査の際に重大な結果を招かないためである。

彼女の唯一の問題は夫がないこと。サビナはオールドミスになることを怯え、母は「年を取ってから寂しいよ」と脅して彼女の夫候補を探し「見合い」

させるが徒労に終わる。

サビナは本当に興味を持っているのは確かな才能を持ったある詩人なのであるが、彼はすでに結婚していて、気難しく、どんな妥協をも望んでいない。彼女もそれ以上の高望みはしない。映画館で記録映画に出てくる半裸の兵隊の姿を眺めている日常だけで十分なのである。

この退屈な地平線に突然、ハンサムで男性的で紳士的なブロニスワフ＝写真中央＝が現れる。彼はサビナに一目惚れし、彼女の方も同じだった。ロマンスが発展した。愛と結婚の名のもと、サビナは彼に教育がないことも、階級が異なることも、強姦のような性交渉も許してしまうのである。

喜劇か悲劇か 女三代

この瞬間から映画の雰囲気は暗くなり、映画のタイトルが意味を帯びることになる。原題の”Rewers”とはポーランド語では硬貨あるいはメダルの裏面のことであり、その通り、サビナ家の3世代の女性たちは裏の性格を見せるのである。表面的には弱く従順な彼女たちが男性よりも決然とし、サビナを救い、ブロニスワフの運命を隠すためなら何に対しても後に引かないのである。こうしてサビナは生き抜き、ブロニスワフの子供を産み、彼の父は、独立のために闘い、公安に殺害された英雄であると子供に信じ込ませて育てるのである。



『裏面』は風俗喜劇、悲劇、フィルムノワール、ブラックコメディの要素を含んでいる。これはとりわけ滑稽な映画ではないが、サビナ家の洗練さや価値観といった戦前に当たり前だったものと、サビナの上司や求婚

者、公安のようなサビナ家にとっては新しく見える、がさつで野蛮なものとの間のコントラストからユーモアが生まれている。

サビナと兄のアレクは、戦争で燃え尽きた詩人ヴォジツキと同じ失われた世代に属す。この世代はポーランドが独立を獲得した最初の時代に生まれ、「神、名誉、祖国」という合言葉のもと愛国主義の



POLAND ポーランド現代映画セレクション 2004-2009 POLAND



精神の中で生まれ、戦争時代には、アンジェイ・ワイダの『地下水道』の主人公たちのようにドイツとの闘いで活躍し命を落とし、ワイダの『灰とダイヤモンド』の主人公たちのように、その後には共産主義者との闘いで命を落としたり、公安により刑務所送りとなった世代である。

映画の中では兄のアレクが地下組織のために書類を偽造し、サビナはワルシャワ蜂起の際に武器を手に闘う用意があったことが明らかになる。そして今では普通の生活という名のもとに新しい体制と和解しようとしている。生き残るため、安定するための唯一のチャンスは、権力に従順になることであり、多かれ少なかれ妥協することである。彼らのモットーはすでに「神、名誉、祖国」というよりも、「家族、安全、生活」である。

脱カトリック、脱英雄伝説

現在の 21 世紀の視点からみると、主人国の女性たちに宗教観が欠けていることがとりわけ驚かせる。サビナの家族にとってすべては現世の生活の現実に従っている。病や死は人生の自然な一部であるし、会話の中ではそのように扱われている。結婚は愛がなくても問題なく、結局、愛は永続しない。サビナの祖母は孫娘の秘密を墓の中まで持っていく準備ができていた。その一方でブロニスワフにより身ごもった子供の中絶のことを考える際には、致命的な罪を犯すことになると脅すのではなく、老後の支えとなるチャンスという現実的な視点からサビナを励ますのである。ここで説明しておかねばならないが、中絶は、カトリックのポーランドでは政治上もっとも議論の的となるテーマのひとつである。現在のシーン(画面はカラー)の中で、サビナの息子が、死者の祝日に友人とポーランドに帰国し、この友人がカトリックポーランドのもうひとつのタブーを犯すことになるホモセクシャルであることを暗示しているのは偶然ではない。

この映画はなぜ 2009 年から 1950 年代にまで時代を遡っているのか、考えたみたい。実際、映画の舞台は現代であったとしてもうまくいったはずである。おそらくこれは同じこの時期における、ワイダ作品の大部分の男性的な主人公たちによる偉大な理想の名のもとに行われた運命論や自己犠牲という立場と、サビナ家が最優先する女性的なヒエラル

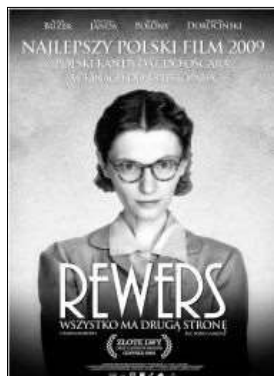


劇的な出会いをしたサビナ(左)と
ブロニスワフだったが・・・

キーの世界との衝突が問題になっている。そこでは男性たちは何かの問題のために命を落とすか、ヴォジツキのように鬱状態になるか、サビナの兄のようにアルコール中毒になるかであるが、女性たちは、日々の生活に集中し、生き、次の、おそらくはより良き世代を産むのである。

部分的にはこの映画は 2005 年から 2007 年にとりわけポーランドの政治で支配的だったいわゆる清算という傾向について語っている。それは保守的で反共産的で、社会主義時代のポーランドを暗黒時代と捉え、ブロニスワフのように共産主義政権に仕えた者、あるいは彼らに協力した者を清算し、罰し、公的生活から追放し、他人に密告するような右派が政権についたのだった。2009 年にポーランド人の大部分はこのような背景を持っており、一部の人は当時に対し郷愁を覚えていた。『裏面』はこの雰囲気にもマッチしたのだ。それは英雄的な反体制派の伝説を非難し、その代わりに、たとえ新しい現実にも同意するという代償を払ってでも、単に普通に生きることを望む女性たちを主人公としているのである。その一方で、スターリン時代においてさえ、妥協にも一線があり、依然として名誉には意味があったのである。

この作品を外国の観客、とくに日本の観客はどう見てくれるだろうか。歴史的な背景を含めて理解するのは簡単ではない。緩慢な展開や白黒のフィルムは観客に嫌気をおこさせるかもしれない。このテーマ自体が、少なくとも大まかなポーランドの歴史に対する知識を必要とする。しかしこの映画は緻密に練られ、問いに溢れ、当時の社会とポーランド史の断片を描きだす。映画が好きで、ポーランドに多少とも関心を持ち、知的好奇心に満ちた人々は、コインの裏側から多くを知るに違いない。(了)





薄氷の上の危うい幸福

～クシシュトフ・クラウゼの世界観～

佐光 伸一

『救世主広場』

(2006)

ヨアンナ・コス＝クラウゼ、
シュトフ・クラウゼ監督

われわれが映画館に足を運ぶ際、そこに何を求めているのだろうか。退屈な日常生活や厳しい現実を忘れさせてくれるような空想的なストーリーであろうか。いかに寒々としたものであろうと真実と向き合うことで、生きるためのヒントを掴むためであろうか。『トリコロール』『ふたりのベロニカ』などで知られるポーランドの巨匠クシシュトフ・キェシロフスキは同じ素材から結末の異なる2つの作品を創作している。テレビドラマ用に制作され10本の短編映画からなる『デカローグ』シリーズの第5話、そしてそれを長編劇映画用に編集し直した『愛に関する短いフィルム』である。

前者は2人の登場人物たちが今後二度と会うことがないと理解させるような、ドライで簡潔な結末。後者は、これからあらゆることがまだ可能であると思わせる、魅力的な結末になっている。キェシロフスキはその理由を「映画の観客はストーリーを求めるから」と説明している。

『救世主広場』の監督クシシュトフ・クラウゼは社会の問題、日常生活に潜む病理などをドキュメンタリーのように緻密にそして残酷に描き出すことをその作風としている。キェシロフスキ風といえば、「映画の観客」には、あまり優しくない監督と言えるかもしれない。

クラウゼは1953年生まれの現在57歳、ワイダやスコリモフスキーと言った名監督がまだ新作を発表し続けているポーランドでは中堅世代の監督である。この世代のポーランドの監督にしては珍しく、

『救世主広場』を含めると日本ですでに3本の作品が公開されている。

2005年に東京国立近代美術館フィルムセンターで開催された「ポーランド映画、昨日と今日」の中で公開された『借金』(1999)、実在したポーランドの伝説的画家ニキフォルの伝記映画『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』(2004)、そして今回札幌で初上映の『救世主広場』(2006)である。ここでは『救世主広場』を中心としながら、他の作品にも触れることで、クラウゼの描く世界を考察したい。

(以下ネタバレ可能性あり)

『救世主広場』の現実

建築中のマンションを購入した若い夫婦ヴァルテクとベアタは、完成までの間、2人の子供とともに、夫の母テレサのマンションに仮住まいする。しかしマンションの宅地造成業者が倒産したことにより、投資した大金も新居も失う。行き場のなくなった彼らは、母と同居することになる。妻と母との対立、生活の不安、夫の裏切りなどにより、一家はやがて大きな悲劇へと導かれていく。

ここで描かれる日常に潜む小さなすれ違いは、われわれの誰もが日々体験することばかりである。それが積み重なり、大きな悲劇に至る様を、昆虫の生態を観察する生物学者のように緻密に分析的に描き出す。

ここで繰り返されている世界は家族の「モノドラマ」である。母、夫、妻それぞれが自分の価値観に基づき行動し、それは決して交わることがない。それぞれが語ることばは、他者と響き合うことなく、あくまでも自己完結的なモノログなのである。それはカメラワークにも表れている。狭いフレームでの短いショットを積み重ねることによって、ドキュメンタリーのように、対象を動きの中で捉えることで、登場



人物たちの孤立感が強められている。最後のシーンは希望をわずかに感じさせるが、それはあくまでも「個」としての良心のめざめであり、他者への信頼が復活する予感はない。

ポーランド人と黒い聖母

救世主広場とは、主人公たちが暮らす通りの名称である。グーグルマップで確認したところ、ポーランドに実際に4カ所このような名称の通りが存在する。しかしここでクラウゼは、何かを象徴的に示しているように思える。「救世主」ということばでポーランド人がすぐに連想するのがヤスナヤ・グラ修道院の「黒い聖母」像の絵画である。1655年、スウェーデン軍がポーランドを侵略した時、ワルシャワやクラクフまでもが占領されたが、ヤスナ・グラ修道院だけはスウェーデン軍の攻勢に屈せず、「黒い聖母」がもたらした奇跡だと語り継がれている。日本での「神風」神話にあたる。その後もポーランド国家受難の際には、必ずこの「黒い聖母」が持ち出され、連帯の時代にはワレサもこの黒い聖母像をピンで下襟につけて活動していたほどである。



マリア像のアイコン。
クラクフ近郊のヤスナ・グラ修道院の貴重な宝。

このように聖母信仰の強いポーランド人にとって、救世主とは聖母マドンナの特徴である「母性」、「慈愛」を象徴していると考えることができる。しかし映画の中で描かれる「救世主」の「広場」であるはずの家庭には、「母性」も「慈愛」も存在しない。母テレサも妻ベアタも、仕事、プライベートなど自己の利益にしか関心を示さない。子供たちがこの小さな地獄の中で救いを求めていることに気づかず、2人の対決は悲劇へつながって行く。このタイトルによって、現代の家庭の現実を容赦なく断罪しているように筆者には思える。

都会と村 厳しい格差

この作品における母テレサと妻ベアタの対立は、都会出身の母と村出身の妻という、2人の出身地の違いが背景にある。現代の日本人はすでに、この都会と村という対比に対する感受性を失いつつあるかもしれない。しかしポーランドをはじめ東ヨーロッパ諸国では、都会と村の所得格差、村の若手の高い失業率など、この両者の生活条件の違いが大き

な社会問題となっている。ポーランドを旅行したことのあるものなら誰でも、EUに属するこの国が、地方ではいかに貧困という現実を克服できていないかに愕然とさせられるはずである。映画の中では、村に住む兄の家族は、牧歌的な平和さに包まれ描かれている。都会に出てきたがそこに順応しきれないベアタは、一貫して非理性的な行動を取る。急速に資本主義が浸透するポーランドにとって、従来の村的な価値観が崩壊していく様を、社会学的なアプローチで分析している。

この映画を観て観客にとって一番衝撃的なのが、ラスト近くに出てくるベアタと子供たちの親子心中のシーンであろう。欧米の観客にとっては、馴染みのなさゆえの衝撃であり、日本の観客にとっては欧米でもこの非常に「日本的」な最後の選択肢が存在するのかという驚きであろう。ポーランドはカトリックの国である。よく知られているように、カトリックの国では自殺は厳しく禁じられている。

しかしWHOの最新の国別自殺率のデータを見ると、日本が年間10万人あたり24人で世界第6位、ポーランドは15.2人で世界24位であり、極端に少ないわけではない。ただ社会的風当たりは依然として強いようで、自殺者は通常、「車で轢かれた」となることが多いようである。

心中に関しては、ポーランドのタブロイド紙のデータベースを調べたところ、高校生の親友同士が列車に飛び込む、親子心中に関しては、乳飲み子を抱いた母親がマンションの屋上から飛び降り自殺などの事例が確認できたが、やはりきわめて稀なようである。個人主義の確立した欧米では、生きるか死ぬかを選択する権利はたとえ赤ん坊であっても子供自身にあるという考えが浸透している。映画の中で検事の意見として、未遂であるにもかかわらず「最高の15年の刑が科される」というのは、このような社会背景があるのである。それゆえ監督がベアタに与えた選択がいかに重いものであるかが理解できる。

クラウゼの作品では、いかにわれわれの幸福が薄氷の上に成り立っているかを示す。自分の足が拠り所としている価値観がいかにもろいものか、いかに幸運な偶然が重なり、今日という一日を何事もなく終えることができるのか、そしてそれはある日いとも簡単に崩れさる可能性があることを描くのである。しかし、彼の作品を見た後にわれわれの心に残るのは、人生に対する虚無感ではない。「黒い聖母」像から感じるような、底光りする希望のひかりなのである。幸福はもろく儂い。もろく儂いからこそ愛



おいしいという、生に対する狂おいしいほどの愛情を彼の作品には感じる。当たり前のように享受しているこの幸福は、ある日ふとしたことをきっかけに崩壊する。しかしそれと同時に、その絶望のただ中から希望へ至る道のりもそう遠くはないことを、彼は示唆するのである。

ここで最初の問いに戻りたい。人は何を求めて映画館に足を運ぶのだろうか。クラウゼの作品は、冷酷で厳しい現実をわれわれにありのまま提示する。彼はフィクション性を弱め、ドキュメンタリー的に登場人物を描くことで観客に「これは自分の姿ではないか」と感じさせる。われわれは日々いくつもの選択を行いながら生きている。この選択肢の集積こそが人生なのだ。クラウゼの主人公たちは、われわれが選ばなかった人生、われわれが選ぶかもしれない人生を、われわれの代わりに生きてくれているように思える。彼の作品に触れる時、観客は自らの足元の価値観をもう一度見直すことを求められるのである。

人生の岐路で、なぜか何度も振り返る映画というものがある。クラウゼの作品こそそのような映画であると言える。

ポーランド版

「ブリジット・ジョーンズの日記」

佐光 伸一

初めにお断りしておくが、深遠な哲学を求めて映画館に通うひとには、ここで紹介する2本の映画はまったくお勧めできない。しかし、若いカップルが週末にデートで見に行くような映画こそ、その国を



『あなた、嘘をつかないで』
ピョートル・ヴェレシニャック監督

を知るための一番いい教科書であると考えられるような、心のオープンな方にこそ、ぜひこの2本を観ていただきたい。どのようなタイプの顔がその国で美男美女とされているか、彼ら



『ぜったいにダメ!』(2004)
リシャルト・ザトルスキ監督

にとって手に届く範囲での夢とは何か、そしてファッション、登場人物たちの会話など、興味は尽きない。『ぜったいにダメ!』、『あなた、嘘をつかないで』の2本はともに人気の女性脚本家ウェブコフスカによるものである。ここでは『あなた、嘘をつかないで』について少し紹介してみたい。

アーニャとマグダというふたりの女性は、少しピュアでナイーブすぎる、映画の世界にしか存在しない、非現実的なキャラクターのように思えるかもしれない。しかし筆者にとっては、ポーランド留学中の友人の顔を何人も思い出すほど、典型的なポーランド人女性である。96%の国民がカトリックであるポーランドは、恋愛に対するアプローチが、日本人から見ると少し「オクテ」なのかもしれない。

またぜひ観て欲しいのが、男のダメっぷりである。出てくる男はすべてが情けない。これはこの2本に限ったことでなく、シリアスな映画も含め(今回上映する『裏面』、『救世主広場』も同様)、ポーランド映画では、女性を理想的に、男性を優柔不断か度の過ぎた理想主義者(あるいはそのなれの果てのアルコール中毒)として描く傾向がある。しかし筆者のような男性的視点から見ると、彼らはみな愛すべき馬鹿であり、とても親しみが湧いてしまうのである。

最後にオタク的情報を少し紹介したい。主人公の男性がスポーツジムのサウナに入るシーンがあるが、その背後に見える巨大な建物は、『裏面』の最後のシーンに出てきた文化宮殿である(スターリンからの贈り物)。

主人公マルチンの母親役は、ケシロフスキの『愛に関する短いフィルム』の主演女優グラジナ・シャポウォスカ、叔母のネリーを演じているのは、ワイダ作品にも多数出演している名女優ベアタ・ティシキェヴィチである(『救世主広場』でも本人役でちらりと登場)。

またラスト近くで傷心のアーニャが見ているテレビには『ぜったいにダメ!』の一場面が映っているなどのお遊びもある。ワルシャワとクラクフの美しい風景もぜひお楽しみください!

(さみつしんいち/事務局長・北大学術研究員)



百花繚乱の季節到来。
ピアノの調べを楽しむ週末。
大切な方と一緒に過ごしてください。

2011.6/4 (土) 開場 PM 6:00 開演 PM 6:30
札幌サンプラザコンサートホール 全席自由 ¥2000 (消費税込み)

会員無料

I 「ソロ」

ショパン	ノクターン No.13 Op.48-1 c・moll ノクターン No.14 Op.48-2 fis・moll	石澤 麻里
L.J.パデレフスキ	メヌエット Op.14-1 G・dur	木曾 育恵
M. モシユコフスキ	スペイン奇想曲 Op.37	
F.ショパン=F. リスト	ショパンによる6つのポーランド歌曲 Op.74	川本 彰子
A.N.スクリャービン	ソナタNo.2「幻想」Op.19 gis・moll	高橋健一郎

II 「デュオ」

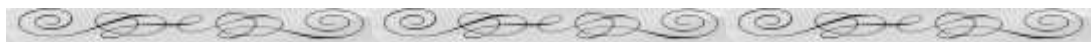
M. モシユコフスキ	サラバンドD・dur パスピエ A・der マズルカ D・dur	安藤むつみ 名取百合子
L.J.パデレフスキ	ピアノコンチェルト Op.17 a・moll1 楽章	高島真知子 薄井豊美
F.リスト	ドン・ジョバンニの回想	本田真紀子 名取百合子

主催/北海道ポーランド文化協会

後援/駐日ポーランド共和国大使館・札幌市・札幌市教育委員会・北海道新聞社・日本ショパン協会
北海道支部・札幌大学・(株)ヤマハミュージック北海道札幌店・(株)河合楽器製作所北海道営業部

交通/札幌市北区北24条西5丁目 地下鉄北24条駅より徒歩3分

お問い合わせ先/011-377-4780(小林)



第1251回
札幌市民劇場
松井亜樹
ソプラノリサイタル
「スラブ音楽の夕べ」



歌曲の魅力をつぶりと・・・

3月5日(土)、ザ・ルーテルホールで開かれた「スラブ音楽の夕べ」。当協会の会員で声楽家の松井亜樹さんがロシア作品をはじめ、同じスラブ語圏のチェコやポーランドの曲を披露。

同じ詩を違う作曲家が曲をつけたものを比べながらの演奏をはじめ、詩の朗読とともにロシアロマンス(歌曲)が繰り広げられた。

また、ピアノ伴奏/演奏を楽しませてくれたのも当協会の若手運営委員、高橋健一郎さん。ピアノソロではシマノフスキ「エチュード」Op.4-3に浸る。二人の精力的な活動に対して当協会も後援団体のひとつになった。

なお、高橋さんは、6/4コンサート(上記ご参照)ではスクリャービンの曲(ソナタNo.2「幻想」Op.19)を演奏されます。



今後の活躍も期待される
高橋さん、松井さん



魂の深奥を表現する演劇「能」と、
魂の歌「ショパンの音楽」との出会い
ポーランド大使作品、
ショパン主題の能を上演



「調律師 — ショパンの能」 を観て

霜田千代麿

2月28日午後6時30分より、東京の千駄ヶ谷にある東京能楽堂に於いて、新作能「調律師-ショパンの能」(90分)という公演があった。当日は高松宮妃殿下も観劇された。美智子皇后も観劇の御希望であったが何か御都合が悪かったという事が紹介された。実は平成天皇御夫妻がポーランドを訪問された時、通訳をされたのがイガ・ロドヴィッチ大使であった。

5時半の開場前から沢山の人々が正面玄関前に押し寄せた。開場は10分程遅れて始まった。6時過ぎに大使もホールに姿をあらわした。昨年2月にさっぽろ雪まつりの時に行われた「ポーランド・デー in 札幌」以来の再会であった。元気そうに振るまっておられたが、体調の方は充分とは見えず、3月3日の金沢公演は欠席との旨、パーティーでスピーチされていた。

「調律師-ショパンの能」は言うまでもなく、イガといふ日本文学研究者の力があってこそ完成されたものである。彼女はポーランドにおいて、演劇の勉強をした役者であり、劇団にも所属していた。同時に東大留学中は鏡仙会(てつせんかい)で観世寿夫(ひさお)や観世栄夫(ひでお)の指導の下、観世流の謡(うたい)から能を演じた事のある実践者である。ポーランドへ能を紹介した第一人者である。公演の後、日本企業、学者、能楽、音楽、演劇関係者のパーティーが開催され、(40名程)私も北海道ポーランド文化協会、演劇関係者として参加した。

その時、イガが僕にいった言葉は「どう一。涙が出た」と訊ねられたが、その時はその意味がわからなかった。しかし、今、このレポートを書いていて、はじめて彼女の言葉の意味がわかった。

この作品は単なる新作能というにはとどまらず、彼女の生きてきた集大成なのだという事である。東京留学中、山の手線の車中で彼女が「私は今、静岡県三島市にある中川宗淵(そうえん)老師の龍沢寺(りゅうたくじ)へ通っている」と言った事を記憶している。その時、私には日本文化の趣味としてやっているとしか理解していなかった。実は彼女は一つの作品を創作する



<前シテ>
調律師 観世鍔之丞

<後シテ>
ショパンの霊 観世鍔之丞

<ピアノ> 横山幸雄

<ワキ>
ドラクロワ 殿田謙吉

<作>
ヤドヴィガ・M・ロドヴィッチ



▼横山幸雄

ピアニスト。1971年生まれ。19歳の時に、ショパン国際コンクールにおいて最年少での入賞、以来人気実力ともに音楽界をリードする若き巨匠。昨年は生誕200年を迎えたショパンのシリーズを全国各地で展開し、中でも5月4日に行ったショパン・ピアノ・ソロ全166曲コンサートでは、16時間におよぶ全曲暗譜演奏の偉業を成し遂げ、大きな感動と反響を巻き起こした。

▼観世鍔之丞

シテ方観世流能楽師。1956年生まれ。八世観世鍔之丞静雪(人間国宝)の長男。伯父観世寿夫、および父に師事。4歳で初舞台。2002年、九世鍔之丞を襲名。鍔之丞家の当主として、また鍔仙会の棟梁として能界を担う存在。力強さと繊細さを兼ね備えた謡と演技には定評がある。

為の「自分の塔」を積み上げるべく基礎の部分を着々と作っていたのだと、今思う。龍沢寺(りゅうたくじ)は白隠禅師ゆかりの名刹であり、当時中川宗淵というすばらしい老師の居る寺でもあった。

この時から、彼女は禅から能の奥儀を極めんと研鑽をしていたのであろうか。

しかし、本当に良く出来上がっていた。ワキのドラクロワと前シテ、調律師、後シテ、ショパンの霊。舞台正面の上手(右)下に置かれたピアノ、能楽堂にショパンのノクターンが響きピアノ曲でショパンの霊が舞う。本当にこの夜、ショパンが正に降臨した感動に襲われた。何と全てが違和感もなく一体融和した事であらうか。成功させたのは、鍊仙会の人々との深い人間関係と、東大留学中の同期生である訳者、関口時正(東京外国語大学教授)であり、横山幸雄という名ショパン奏者(ショパン・ピアノソロ全 212 曲完全奏破者)を中心として、様々な人々の力であった事と推察する。

2011年2月20日、ポーランド帰国公演はショパンの心臓が安置されているワルシャワの聖十字架教会において奉納上演された。「調律師-ショパンの能」は不朽の名作として、これからも長く、日本で、世界で上演されていく事はまちがいの無い事と確信する。

高く、深い精神性のある作品であった。

2011.03.14 副会長(しもだ・ちよまる)

ヤドヴィガ・M・ロドヴィッチ駐日ポーランド大使が執筆した新作能「調律師-ショパンの能」が、28日午後6時半から、東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で上演される。



駐日ポーランド共和国
特命全權大使

ワルシャワの大学時代に能と出会った日本研究者だが、能を書いたのは初めて。「日本人がどんな反応をするか緊張している」と心境を語る。

大使は2年前、音楽家のショパンを主題にした新作能を書き始めた。改稿を繰り返し、観世鍔之丞らが手を入れて昨年完成した。ピアニストの横山幸雄が能囃子(はやし)方と共に演奏を行う。鍔之丞がシテ(主役)となり、ワルシャワでも今月17日から19日まで上演する。

帰国中の大使は国際電話での取材に「ポーランドで能の認知度は高い。ショパンという人間を主人公にしたことで、新しい能の表現が生まれたら」と語る。23日に日本に戻り、国立能楽堂公演にも立ち会う。「能は、死者の世界と私たちの世界を結びつけるという他に例を見ない構造がある。この魅力を母国、そして日本の次の世代につなげたい」と話している。

(2011年2月14日 読売新聞からの転載)



あらすじ

かつてショパンがジヨルジュ・サンドとすごし、数々の名曲を産みだしたフランス、ノアン村の別荘をショパンの親友画家ドラクロワが尋ねる。

そこに調律師(前シテ)が現われ、

この別荘のピアノを整え、この鍵を打てば

人を呼び寄せられ、和声と対位法の

あわいにひろがる呼び声の宙に向かうという。

さらにピアノは宝の蔵であり、柩であり、心の蔵であり、

そのなかに我が命を聞くという。

調律師は自分はショパンの靈魂だと明かし、

夢での再会をドラクロワに約束して消える。(中入)

まどろむドラクロワにショパンの子守唄(変ニ長調 作品57)と

前奏曲(24の前奏曲第四番ホ短調 作品28)が聞こえてくる。

その前奏曲の演奏のうちにショパン(後シテ)が

ありし日の姿で現われ、音楽への思いとその本質を語り、

自分の音楽が永遠に到るための一歩であると

ノクターン(第七番 嬰六短調 作品27-1)により舞を舞う。

やがてパリで客死した自分の心臓が納められている祖国に、

我が魂を届けて欲しいと訴え、去っていく。

最後にノクターン(第二十番 嬰六短調(遺作)

レント・コン・グラン・エスプレッショネ)が演奏される。





今後の活動予定

同封した招待券をご使用ください。2本目からは有料です。

◆<第55回例会>
ポーランド現代映画セレクション **会員は1作品無料**
4月16日(土)~17日(日) 北大学術交流会館小講堂

◆ **ピアノコンサート 会員無料**
6月4日(土) 札幌サンプラザホール

◆<第56回例会>
ポーランド文学作品朗読会 & 懇親会 **会員無料**
6月18日(土) 北海道大学クラーク会館

※秋には大規模な駐日ポーランド共和国大使館との共催イベントを予定。日程等の詳細が決まりましたら、POLEでご案内いたします。

もうすぐ祝25周年!

～事務局から～

私たちの「北海道ポーランド文化協会」が設立されたのは1987年10月のことです。

来年度は25周年を迎えます。

今日まで50回をこえる例会という形で、ポーランドの文化の紹介にささやかですが努めてきました。

そのような活動の様子は会誌「ポーレ」を通して会員の皆様に伝えてきました。次へのステップアップをひとりでも多くの方とともにほかりたいと願っています。

新規会員募集

あなたのお友達をご紹介ください! 下記の内容をハガキにまたはFAXにて事務局までお送りください。

〒001-0032

札幌市北区北32条西5丁目2-31-902

佐光方 北海道ポーランド文化協会

電話・FAX 011-790-8610

①・②どちらかに○をつけてください。

① <ご案内送付>

ポ文協の会誌「POLE」と「入会申込書」を送ってください。

② <入会届>

指定の【郵便振替口座】に●月▲●日▼◆■円を振り込みました。

----私()は、下記の方を 紹介します。

・お名前 ・〒住所 ・☎/FAX ・e-mail

※上記の情報を名簿に記載し、会員間の連絡に使う場合があります。

同意する ・ 同意しない (○で囲んでください。)

お忘れではありませんか?
～会費納入のお願い～

<2010年10月～2011年9月分>

【郵便振替口座】

02740-5-19735

北海道ポーランド文化協会



- ◆普通会員(年額) 3000円
- ◆維持会員(年額1口) 5000円
- ◆学生会員(年額) 1500円

はやいもので本年度も、下半期(4-9月)に入りました。

当会は、皆様からの会費によって運営されています。

未納の方には「振替用紙を同封」しました。すみやかな納入を宜しくお願い致します! m(_)_m

68号に間違いがありました。 訂正をしてお詫びを申し上げます。			
頁	行	誤	正
4 左段	上から 18行目	2009年～	2010年～
4 左段	下から 13行目	2)映画上映 会～のあとに	「2月6日 (土)」を加筆
4 左段	下から 10行目	3)<第54回 例会>	削除。1行お いて6月18 日(金)を加筆
10 左段	上から 2行目	国家を～	国歌を～

個人情報と名簿作成について
(プライバシー・ポリシー)

皆様のご協力により「会員名簿2011」を作成中です。是非、今後の活動に役立てていきたいと思っております。

なお、変更や訂正など最終確認ができ次第、次号の会誌「ポーレ」と一緒に同封いたします。

POLE

第69号

ポーレ編集委員会

氏間多伊子/栗原朋友子/小林美保
越野 剛/佐光伸一/ラファウ・ジェブカ

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 69 号 (2011 年 4 月)

目 次

〈第 55 回例会ご案内〉氏間多伊子「ポーランド現代映画セレクション 2004-2009」、佐光伸一「“民族の傷”捉え直す新世代の映画作家たち—『裏面』に見るワイダ的伝統への敬意と挑発」、中村京子「最高！お茶の間試写会—実行委に参加して」、トマシュ・スタシンスキ「金貨の『裏面』にひそむ秘密」、佐光伸一「薄氷の上の危うい幸福～クシシュトフ・クラウゼの世界観～『救世主広場』」、佐光伸一「ポーランド版『ブリジッド・ジョーンズの日記』[『ぜったいにダメ!』、『あなた、嘘をつかないで』]」	1
北海道ポーランド文化協会コンサート [2011.6.4] [案内] / [後援] 松井亜樹ソプラノリサイタル「スラブ音楽の夕べ」～歌曲の魅力をたっぷりと [案内]	9
霜田千代磨「『調律師—ショパンの能』を観て」	10
[事務局より] 今後の活動予定：ポーランド現代映画セレクション 2004-2009、ピアノコンサート、ポーランド文学作品朗読会&懇親会、もうすぐ祝 25 周年！、個人情報と名簿作成について (プライバシー・ポリシー)	12